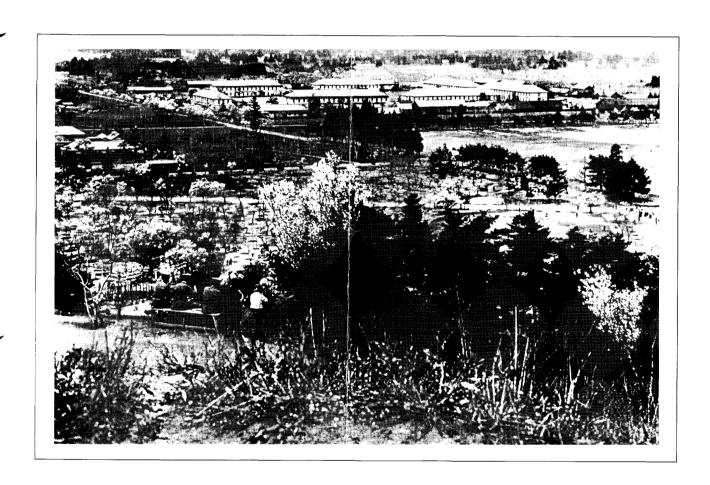
図が近は緑なり



村松高等学校東京同窓会 第43回大会 プログラム

平成12年6月3日(土)午後2時 会場・日比谷・リトルパイレーツ

◎第一部 総 会

⊕ No The War	A
① 大会	会実行委員長挨拶 委員長 伊藤 勇五
② 東江	京同窓会長挨拶 会長佐伯益一
③ 同	窓会長挨拶
④ 学	校長挨拶 校 長 杉原 雅昭
⑤ 平原	成11年度経過報告 総務委員長 斉藤 和男
⑥ 平原	成11年度会計報告 財務委員長 鈴木多喜男
⑦ 会	計監查報告
⑧ 役	員改選
9 東	京同窓会長挨拶
◎第二部 &	阅 会
①•乾柿	杯 出席者の中から
②・ア	トラクション 演歌歌手 杉 幸子
③•抽动	選会 篠 川 恒夫、佐久間英輔 ほか幹事
④•校哥	歌・応援歌 ······ 全 員
⑤•手約	締め 東京同窓会長(総会で選出)
⑥•閉结	会挨拶 副会長 岡本 和子

☆ 司会・進行 …… 総務委員長 斉藤 和男

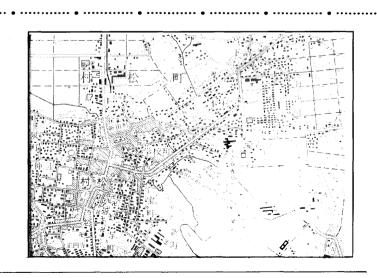
◎表紙について

酒井 忠氏(旧中24回卒)昭和11年 4月撮影 (西暦1936年)

村松町・愛宕山(海抜 103m) より兵舎の全景 村松公園の桜も満開、花見の季節 (腰掛台で兵隊さんが、束の間の休息)

> 正面、遠方に兵舎……中央は村松公園 (右の地図、参照)

☆全国各地の愛宕山の本家は、京都市の西北に 位置し高さ924mで、嵐山・渡月橋から山 容が望め風格もあり、1988年の京都国体 山岳競技のコースとなった。



東京同窓会第43回大会にあたり

大会実行委員長 伊藤 勇五(旧中33)



"光陰矢のごとし"過ぎ行く歳月は本当に早いものだ と、つくづく感じております。

西暦2000年を迎えるにあたり、所謂コンピュータ 一問題が世界中の大きな関心事であったが、懸念された トラブルも殆どなく先ずは平穏に明けてホットした事が、 ついこの間のような気がします。

六月の初めころには、ふる里・村松ではすっかり早苗 田に衣替えした蒲原平野に、緑の風が吹き渡っているこ とでしょう。そんな折、母校村松高校東京同窓会第43 回大会が開催される運びとなりました。これも偏に会員 皆様のご協力があればこそと、心から感謝し厚く御礼申 しあげます。また、前年の大会が終わるや直ちに今年の 大会を目指して準備を進めてこられた、佐伯会長はじめ 役員、実行委員の諸兄には大変ご苦労様でした。

今年の大会は、会報28号でご案内の通り、東京のド 真ん中、皇居のお掘りを望む日比谷公園の近くに会場を 設定いたしました。はたして〈皆様の反応は如何か〉と、 期待と不安が半々の心境です。会場への道すがら、お掘 や公園に足を運ばれる方も居られるのでは、と思ってお

ります。同窓の方々の集まりが、楽しく生活にハリをも たせるような懇親の場となれば幸いと存じます。

今年は、天災・人災と暗い話題が多く、未だに景気の 回復なく、日々の生活の好転を希っても、一向に先が見 えて来ない中、同窓の各位も夫々に頑張って居られる訳 で、東京同窓会の役割が大事なものと考えております。

東京同窓会でも、多くの会員の方々が高齢に達しつつ あります。長老の皆様には一層のご自愛とご健勝を願う と共に、積極的に東京同窓会のPRを行い"広げよう松 高同窓会の輪"の通り、若い人達の入会勧誘を心懸けな ければと思っております。私なりに期していることは、 「いつ何処にいても気配りを欠くな、思いやりを忘れる な」。親からよく云われたこのことを、改めて胸に刻ん で少しでも東京同窓会のお役に立てるよう、心して参り たいと思っています。

会員の皆様も同窓のお知り合いに、東京の大会に是非 ご参加いただけるよう、お誘い下されば幸いです。 東京同窓会第43回大会にあたり、ご挨拶といたします。

平成 11 年度・東京同窓会の動き

平成11年

·幹事会(県人会館…22名) 4月24日 大会準備、案内状発送等の作業

·編集会議(県人会館…6名) 1日 ・常任幹事会(岡本幹事宅…6名) 大会詳細の打合わせ 22目

・大会会場へ行き料理など確認 29日

・第42回大会 6月 5日 浅草ROXニューオータニ 常任幹事、関孝世氏…葬儀告別式

14日 (春秋苑=川崎市生田区)

・幹事会(県人会館…21名) 7月 3日 大会反省及び次回会場の件

・本部同窓会 東京より3名出席 8月15日 **村松町「明月」**

・編集会議(県人会館…9名) 会報28号作成について 9月 4日

・編集会議…会報28号について 10月22日 平成12年6月の大会会場下見

仮予約

·編集会議(県人会館…8名) 11月 6 H 会報原稿等の最終作業

·会報28号、校正作業 3名 12月 3日

> ·幹事会(県人会館…27名) 18H 会報28号発送作業

平成12年

·編集会議(県人会館…6名) 3月 4日 会報29号作成について

ありがとうございました

①平成 11 年度・会費納入の皆さん(敬称略)

◎旧中の部(57名)

相田幸四郎、相田忠亮、相田和平、伊藤勇五、伊藤秀男 伊藤達郎、市川薫平、五十嵐一郎、板垣文平、岩見益教 遠藤順、落合常雄 小見 勇、小田恕哉、 笠原健二郎 片桐賢太郎、亀嶋 謙、北沢卓夫、熊倉 悟、小島眞一 小柳 実、斉藤誠七郎、佐伯益一、坂上庸蔵、佐藤豊夫 佐久間精一、斉藤和男、斉藤朝之、酒井 忠、佐野善吾 坂井太郎、関谷捨藏、高久貞夫、 団 順一、千代國一 寺田徳隣、成海正弘、西山荘平、 二平 晶、芳賀健一 南雲剛、奈良泰夫、福原平八郎、松尾貢、横松宏平 松田長四郎、水尾広吉、宮本 昇、武藤三郎、八須民平 山口三郎、矢部五郎、吉田正平、吉田公男、 芳原英男 渡辺文男, 式場俊三

◎高校男子の部(102 名)

青木 猛、浅井昭男、新井康夫、 荒川 守、安部 実 阿部 敏、石本芳雄、五十嵐 健、伊藤勤吾、伊藤 馥 石黑四郎、稲毛越郎、今井英雄、 伊藤和賢、岩倉富栄 遠藤 順、岡村嘉志、大橋貞夫、大西範考、大島惣四郎 小笠原一憲、亀山知明、川合敏男、川村莞爾、神田弘殼 笠原 久、笠原大四郎、笠原静夫、加藤清治、杵渕政海 岸谷 武、雲村俊慥、倉田健五、熊倉富次、 熊倉芳夫 近藤洋輝、近藤尚志、近藤英洋、近藤殻夫、小日山芳栄 佐久間英輔、 篠川恒夫、 佐々木秀和、 佐々木秀三 佐藤良平、佐藤 赳、斉藤正義、佐藤正秀、 沢出赳允 新保 優、下野文幹、鈴木健司、鈴木輝雄、 鈴木忠雄 鈴木多喜男、杉山 喬、瀬倉武志、関 考世、関谷雄二 関塚 豪、関 和世、 高地 彰、田代信雄、高山幹雄 高岡雄三、高岡英治、 鶴巻旒三、鶴巻 浩、鶴巻静夫 弦卷一郎、弦卷 等、坪谷次郎、土田 猛、 塚田 勝 寺山和夫、中川四郎、中山健、中村雅臣、 二宮文三 根本俊夫、廣田達衛、長谷川宏一、 長谷川五郎 長谷川洋夫、増田訓英、松尾保司、松尾 了、丸山貞次 松尾真一郎、松尾正春、三浦靖典、三室茂和、宮沢正由 武藤正昭、村川恭平、山崎輝雄、山田俊治、山田一男 梁取錦二、八木又一郎、米山正祠、渡辺八郎

◎旧高女の部(14名)

石井洋子、一氏愛子、内田道子、大橋玉枝、 岡本和子 小林早月、佐藤治子、佐藤玲子、新保清子、 鈴木節子 田村ミツエ、藤崎トヨ、堀和子、丸山セイ子

◎高校女子の部(50名)

荒井るり子、安達繁子、飯利 幸、市川 俊、小沢幸子 緒方康子、大橋マツエ、大嶋エミ、神田正子、片柳ムツ 加藤久子、木村孝子、久我マキ、熊倉悦子、桑原トム 小島典子、近藤燦子、許斐紀子、佐々木恵美、斉藤英子 佐藤八重、斎木明子、雑賀和子、佐久間順子、島田淑子 佐野美枝子、白石キヨ、鈴木則子、田中富子、高尾佳子 田川百合子、高浜つる子、高橋眸子、 高橋カツ 寺山征子、出口テル、徳永道子、中島和子、八巻マサ子 深見洋子、松本豊子、松本知子、松尾恵子、真水道子 宮腰ヨイ、向山律子、山西愈佐子、横溝田鶴、吉井祐江 升本久子

男子、159名 女子、64名 合計、223名 金額=669,000円

②平成11年度・寄付された皆さん(敬称略)

(合計, 55名 金額=171,000円)

◎男子の部(43名) 計 金125,000円

10,000円 亀嶋 謙

7,000円 山崎輝雄 酒井 忠

7,000円 川合敏男 式場俊三 今井英雄

5,000円 村山家司

3,000円 黒井伊作 中村市雅一郎

> 熊倉 悟 松尾吉信 山崎民二

2,000円 吉田正平 加藤三代太 吉井 清 武藤三郎 武藤正昭 伊藤秀男 佐々木秀和 関 孝世 吉田公男 中川四郎 松田長四郎 芳原英男 西山荘平 下野文幹 能倉富次 小日山芳栄 佐藤良平 鈴木健司 二宮文三 小田恕哉 伊藤勇五 佐藤 赳 横松宏平 関谷捨蔵 吉田正平 遠藤順 大橋貞夫

沢出赳允 梁取正道

1,000円 八木又一郎 鶴巻静夫

◎女子の部(12名) 計 金46,000円

10,000円 関 良子(香典返し)

8,000円 一氏愛子

4,000円 木村孝子 山西愈佐子 真水道子

3,000円 大橋玉枝 深見洋子

2,000円 横溝田鶴 新保清子 緒方康子

小島典子 片柳ムツ

平成 11 年度会計収支決算書

(平成11年4月1日より平成12年3月31日まで)

新潟県立村松高等学校東京同窓会

収入の部 (単位:円)	支出の部 (単位:円)		
① 11年度 会 費 669,000 男子 160名 480,000	① 会 議 費 3回 81,052 (42回大会準備会費含まず)		
女子 63 名 189,000	② 通信費送料 31,591		
計 223 名	郵便切手・ハガキ 21,735		
	印刷費 5,266		
② 10年度 会 費 6,000	一般送料 4,590		
男子 1 名 3,000	③ 会報発行費 419,111		
女子 1 名 3,000	編集費 (6回) 42,447		
計 2名	No.2 7印刷費 125,580		
	同 送料 42,510		
③ 寄付金 171,000	No.28印刷費 138,075		
男子 43 名 125,000	同 送料 59,660		
女子 12 名 46,000	印刷費送金手数料 840		
計 55 名	寄稿依頼謝礼 7,080		
	封筒代 2,919		
④ 受け取り利子 865	④ 会費払込み手数料 12,670		
864	⑤ 備 品 費 52,500		
1	会旗作成費 31,500		
	大会横幕作成費 21,000		
	⑥ 同窓会本部対応費 33,177		
計 ①~④ 846,865	総会出席費 28,000		
T.D. o Fritz I is - 4H+D.A. A. O.O.F. O.O.O.	写真代 5,177		
平成10年度よりの繰越金 1,837,382	⑦ 新潟県人会対応費 76,530		
	カレンダー購入費 58,000		
	同 送料 10,230		
	催事出席補助費 5,300		
	県人会報購入費 3,000		
O ZEIO A MITTING	8 慶 弔 費 56,769		
(建一預り金処理について) まずれ、1年度を書かれる。	弔・関 孝世氏 41,769		
平成11年度会費納入について6名の方が重複納入	弔・岡本さんご主人 15,000		
されていますが、4名は本決算書に計上せず12年	1		
度分納入会費として処理、2名の方は10年度分と	18,658		
して本書で処理させていただきました。	交通、写真、事務消耗品費 		
合計 2,684,247	合計 1,037,657		
	平成12年度へ繰越し金 1,646,590		
総計 2,684,247	総計 2,684,247		

上記の通り報告いたします。

平成12年4月15日

会長 佐 伯 益 一 邸

上記の決算書は監査の結果、適正と認めます。 平成12年4月22日 会計監査 芳 賀 健 一 ⑩

塚 田 勝⑪

千代 國一氏の歌集を読む

岡村 三夫

村松高校東京同窓会々長の佐伯さんから同窓先輩の、 千代國一氏の歌集「水草の川」(みさかは)をお借りして読ませていただいた。ついでに感想をと言われたので郷土新潟県出身の誇るべき歌人、千代國一氏の軌跡の断片を皆様方に知って頂ければ幸甚と、この拙文を寄せさせていただいた次第です。とは言っても、氏とは特に親しいお付き合いがあるわけでもなく白髪の温顔を何かの折に遠くより拝見する程度ですが、手許にある若干の資料により、その作品を通じて、氏の横顔の一端をご理解願えれば幸いと思います。

まず、氏の略年譜によりますと、大正五年新潟県村松町に生まれ、昭和八年旧制県立村松中学校を卒業、十二年に旧大倉高商(現東京経済大学)卒業。横浜正金銀行(後の東京銀行)に入行、十五年に退職。(合名)大倉組に入社、二十一年大倉製糸株会社取締役、三十五年代表常務取締役、同五十三年取締役を辞し顧問に、五十六年顧問を辞す。この間、昭和十八年、中川京子さんと婚姻とあります。 ……歌歴については……

昭和十五年 窪田空穂、松村英一氏系の「国民文学」に入会、二十五年「新歌人会」結成に参加。五十二年「国民文学」選者、六十二年から「国民文学」編集発行人。現代歌人協会理事を務められて現在に及んでおります。また 平成三年より九年まで宮中「歌会始」の選者としてもよく知られています。以上が概要であります。

短歌を始められた動機について、氏は、エッセイに、 転職時のある時期に(昭和十五年の銀行退職、大倉組入 社時)応召中のご令兄が休暇で、たまたま帰郷された折 に岩波文庫の「子規歌集」を頂き、一読して短歌に興味 を抱かれ、次いで近代歌人の歌集を読破されたが、特に 空穂、赤彦に惹かれその結果、窪田空穂創刊の「国民文 学」に入会、松村英一氏に師事されたと述べられていま す。 作歌のきっかけを作ってくださったご令兄は昭和 二十年フィリピンのルソン島に於て戦死されましたが、 氏は第十歌集「花光」に次のように詠んでおられます。

いくさ

戦より骨の還らぬ兄おもふ 思ひ一つに吾の尽きなむ

以上の通り、氏の短歌の原点は、御令兄の戦死という

悲劇につながっており、作品の折々にこの傷痕が見えかくれするのは、この歌人の宿命とでも言うべきでしょうか。 私事で恐縮ですが、途中空白となりました私の、歌歴の原点も旧制糸魚川中学時代の国語教師、中山礼治先生の、「吾が後に汝(ぬ)が続くを信じつつ 撃ちてし征かむ南戦(かかべき)に」の ハガキによる陣中詠にあることを思い合わせると感慨深いものがあります。

氏の歌集は、昭和二十七年の第一歌集「鳥の棲む樹」より平成十一年の「水草の川」まで十 (千代 國一氏)一冊を数えますが各々の歌集より一、二首づつひいて、氏の作歌と人生の軌跡を辿ってみたいと思います。 ……各短歌の終わりの(~)の註は 岡村記……

◎ 第一歌集 「鳥の棲む樹」 昭和二十七年 唇に盃あつる時の間を

ふるふかなしき汝を見たりけり

(結婚)

◎ 第二歌集 「陰のある道」 昭和三十四年 いきどほり生々(なな)として取り立の

手形拒否する数行しるす

(経営者の決断)

◎ 第三歌集 「冷氣湖」 昭和四十年 かそかなる母と思ひぬ吾が家に

老い衰へて湯を浴める音 (老い母あはれ) 城川(じかぬ)の涸れしそこひも眼にありて

楊柳(やだ)押しゆく雪解の水 (城川早春村松)

◎ 第四歌集 「冬の沙」 昭和四十七年 室生山ひぐらしあまた暁の 闇にとほりて揺りかへす声

(室生寺までの流麗な旅行詠)

② 第五歌集 「暮春」 昭和五十二年 この企業生かさむゆゑに身を退きし

者の涙を声ながらきく

茫茫と坐す薄明の夜を

(経営者の悲哀)

◎ 第六歌集 「花天」

昭和五十六年

昭和五十九年

(ルソン島ダラガ・兄戦死の地にて)

空穂逝き英一老いて身一つの

(老師追慕)

◎ 第七歌集 「天の暁」 椰子と麻鬱たる丘に陥落の 幾日戦ひ兄の果てしなり

● 第八歌集 「風日」 昭和六十二年 遠き代の遠流(をは) の地(か)に咲く花の 蒲公英しろし風に曝(さ) れつつ

(流亡の人を偲ぶ)

◎ 第九歌集 「日曇」暢びやかに講ずるみ歌わが裡(うち)の

平成二年

兵に果てにし兄に徹らむ

(亡兄思慕)

大君の詠ませ給ひしたちばなの

かがよふ朱実(粉粉)ひと日悲しむ(昭和天皇追悼)

◎ 第十歌集 「花光」

平成七年 一首前出

○ 第十一歌集「水草の川」歌詠める五十九年の生き様の

平成十一年

豊かなりしや頷くとせむ

(易からざりし歌の道人の感慨)

以上十一歌集より若干の作品を引き、鑑賞して参りましたが、「国民文学」は写実主義を基に、生活に根ざす 堅実な詠風を標榜していますが、氏の短歌には事実より 一歩進み、人の心の深奥に迫る何かが感じられます。 更に 氏には永年の実業界での活動経験より見た経済界 への、鋭い観察眼を通しての作品が見られます。

この傾向が「まひる野」の篠弘氏等により、職場詠を 含めての一種の社会詠として継承されている事は高く評価されています。決して華やかでありませんが故郷新潟 の風景のように重厚で、対象を直視する 氏の作品に心から敬意を表します。

私も現在、相馬御風創刊「木かげ」、同人誌「葱」の 会員として、この道に関わっていますが平成八年十月の 「多摩歌話会秋季短歌大会」に於て千代國一氏選に拙歌、 選択は常に負なりし過去(がき)を 侘しみてゆく住み古(a) りし街

を、第一位として採って頂いたことが、その後の作歌活動の励みになったことに厚く御礼申し上げて、拙文を締め括らせて頂きます。

筆者経歴

昭和2年生 糸魚川市出身 旧制県立糸魚川中学卒 東京新潟県人会広報副委員長 日本歌人クラブ会員 相馬御風賞受賞



(おかむらみつお氏)

赤山会春季会

◎4月8日(土)午後1時から、アルカディア市ヶ谷、 (私学会館)5階・赤城の間に25名が出席し開催され 旧制中学時代の思い出に浸たれる楽しい一時を過ごした。

奈良幹事長の開会の言葉に始まり、物故会員に黙祷、旧校歌斉唱、吉田会長の挨拶に続いて五十嵐事務局長と佐藤会計幹事から報告のあと、喜寿を迎えた会長、松田、武藤の三氏に長寿祝いが贈呈された。錦上に花を添えてもらったのは、33回卒の遠藤氏が自作の漢詩(別掲)を朗々と吟詠。また、恒例になった卓話では20回卒の中村勤氏が「我が松中勝てり」と題して、野球部黄金時代を築いた苦労話が披露された。記念撮影の後、佐久間監事の乾杯で懇親会が始まり一気に談笑の輪が広がった。

交通事情で遅れた関八十一氏(33回)は、喉頭ガン と戦い奇跡の回復を勝ち取ったとの経過が幹事長から報 告され、全員から温かい拍手を浴び感動的であった。

尚、秋季例会は11月11日(土)、同会館で開催との報告がされた。より多くの会員の方々の出席を期待し 今から皆楽しみにしている。 武藤 三郎(中26)



			平成庚辰三月吉日	庚辰三	平成医	
平成庚辰三月吉日						
淡交一誠実一神に通ずる若し。	示申	若通	實	誠	交	淡
風格 仙に似て 常に壮健、智々 だ に る まが	健	常壯	仙	似	格	風
共に祝す 平成 喜寿の春。	春	喜壽	成	平	示兄	共
松門の朋友、良辰を慶こび、いまえ、いまった。	辰	慶良	友	朋	門	松
(先輩の喜寿を賀す) 遠藤 順 拜			喜壽	輩	賀先	
					咲	

お便りの中から

順不同·敬称略

吉田 公男(旧中27)

◎会報28号をありがとう。恐れ入ったのは「臥龍が丘は緑なり」の旧中27回卒同級会の記事が、あまりにも名文であったことでした。あの号には丁度25、26、27回卒の同級会の記事が並んでいまたしが、贔屓目を差し引いても27回の記事が最も面白かった。一日で一人当たり六本の酒を事もなく飲んでしまう我等同級生の会の雰囲気を十二分に伝えていただきました。在校時代、音楽が得意でもなかった輩が、今では会ともなるとカラオケを歌い踊るあたり、そのまゝ我が身に省みて楽しく読みました。

渡辺 照男(旧中31)

◎東京同窓会々報「臥龍が丘は縁なり」をお送りくださいました有難うございました。

賑やかな東京同窓会の様子が、うまく表現されておりました。盛り沢山の情報やご意見、ご感想の他に、ちょっといい話などがあり、びっくりいたしました。

我が松高同窓会も、間近に迫った創立九十周年記念行事に向けて準備を始めております。実行委員会もスタートしました。力不足を痛感しながら「何んとかしなければ」の合言葉でやりぬこうと話し合っております。

今後とも、ご鞭撻ご叱責を、よろしくお願い申しあげます。 (本部同窓会・副会長)

◎ 敷布団 干せし温もり 良夜なり

雲村 松風(俊慥)(高5)

そのポカポカ布団の中にまで『新潟県人』を持ち込んで「元禄の豹・堀部安兵衛」の1ページにも及ぶPRを 機度も機度も読みました。

読む程に先輩の温もりが身体いっぱいに広がってまいりました。感激です。本当にありがとうございました。カッパの光文社で定年を迎え、初めて小説を書いてみたのです。編集者が作家に変身することは、相撲の行司が力士に化けるみたいなものでしょうか。

ところが、六十才過ぎて書き上げた創作が思いがけな い大賞を受けるなんて、考えてもいないことでした。

「堀部安兵衛」は第二作目。まさに前作がフロックではないことを世に問うたものです。評判は前作より高いようです。ところが新聞や雑誌は前作ほどに取り上げてはくれません。理由は私を可愛がってくれた菊村到氏、尾崎秀樹氏が相次いで黄泉の国へ旅立ってしまったからです。あらためて先人の大切さを悔やんでいたところでした。しかし、それに代わる恩恵を松高の東京同窓会長から受けることになろうとは、夢にも考えていませんでした。とにかく取り急ぎ、お礼の手紙を書きました。

小説は一年一作主義でまいります。これからも色々仕事をしながらも名作を残してまいります。ご指導下さい。 …後便…

会報をご送付頂きましてありがとうございました。 今回の会報はいつもより胸を熱くして拝読いたしました。 もちろん佐伯会長の筆で『元禄の豹・堀部安兵衛』をご 紹介くだされたこともあります。母校の先輩の温かい気 持ちが、ひしひしと伝わってくる、いい文章でした。

私、あまり人の好意に甘えることが無かったので人の 情けのありがたさをしみじみと感じました。

『堀部安兵衛』は出版社の説明では「ソンをすることなく済みました。それにしても新潟で、もっと売れると思ったのですが意外でしたよ」とのことです。私の肚には五泉、村松に、もっと活力を与えたいという気持ちのあったことは事実。ですから少しガッカリしました。

ところが、名古屋で友人を通じて講演を頼まれたのはこれまたビックリでした。活動的な人がいるか否かで、地域の様相はまるで変わってくるのですね。私は会長の「本部総会に出席して」と題する稿を読んでいて「あゝこれだ。村松は死んでいる。これじゃあ駄目だ」と自分でも悔しくなってしまい、思わず「なんてバカな」と、まで叫んでしまいました。村松人は「ショウシだわ」」なんて言って引っ込み思案ばかりしています。私もそうでしたが、人の気持ちになって、ものを考えようとしないのですね。松高が評価された頃は鹿瀬、津川、新津、五泉方面から通学する人達が眠れる者に刺激を与えてくれたのです。だけど今は、あまりにも静かで目覚めることがありません。人は思い出だけでは生きてゆけません。

せめて東京同窓会だけでも、高鳴る血潮を燃え上がらせたいものです。お礼のひと言が、つい本音を吐く結果になってしまいました。とにかく私には向山さんを介して会長に親近感を抱いたことが本を書いたこと以上に大きな収穫でした。

岡村 三夫(糸魚川市)

◎この度「臥龍が丘は縁なり」新春号をお送りいただきありがとうございました。

私どもの旧制糸魚川中学は糸魚川の城跡にありました「亀陵」と呼んでおりますが、東京支部はあるものの、 これといった活動を行っておらず寂しい限りです。

佐伯会長のような熱意のある人が居ればこそ、会は隆盛するものと、つくづく羨ましく思っております。 人生の出発への原点とも言うべき旧制中学、高校にて培かわれた人脈と人の和を大切にして、今後の人生を実りあるものにしたいと思っております。会長始め会員各位のご健康と会の益々のご発展をお祈りしております。

(新潟県人会広報副委員長)

お便りの中から

順不同·敬称略

池田 孝一郎(巻町)

◎「臥龍が丘は縁なり」をご送付いただきありがとうございました。一気に、巻頭の"2000年に斯く思う"から巻末に到るまで読了させていただきました。

まず、高校の同窓会でこのような会報をNO28に至るまで出し続けておられることと記事の多さ(会員及び関係諸氏の長文の原稿)に驚き、そこに佐伯さんが大きな柱として支えておられるさま、ぴーんと筋の通った姿勢を感じ取ることができました。

巻頭言からは、わが意を得たりと感じることは多く、 必ずしも100%同じ考えとは言えないものの、今日の 世相に見る多くの体たらくは戦後教育の欠陥をまざまざ と露呈していることは疑いありません。

また読み進むうち、佐伯さんがリーダーとしてだけでなく書き手としても、この会報を支え盛り上げておられることがよく分かりました。同級会のこと、蒲原鉄道のこと、堀部安兵衛の本のこと等、それぞれ興味深く読ませていただきました。これらを通じて佐伯さんに一層の親近感を感じたことは間違いなく、同じボランティア活動をする同志として、よき先輩を得た思いがしております。どうもありがとうございました。

私も中学、高校、地域、出身郷人会等々いくつかの会に関わっておりますが、それらの活動をする上での沢山のヒントも頂戴できたと思っております。何よりも若々しいその情熱に尻を叩かれました。

(東京新潟県人会広報委員)

川崎市 関 良子

◎夫、孝世(高3回卒・会常任幹事)が亡くなりまして早や半年となりました。その節は同窓会の方々に多数来ていただき、ありがとうございました。村松高校をこよなく愛し、友達とのお付き合いを喜びとし誇りにしており最後まで世話人の役をさせていただき幸せな一生だったと思います。できればもう少し皆様と御一緒にいられたらと、残念だったと想いを残したかなと側でみていた者として感じておりますが、皆様に見送っていただき、やはり幸せだったと思います。

本当に長い間、お付き合いありがとうございました。 ここにお礼を申し上げ、会の益々の発展のために少しで すが、お役に立てていただきたく同封いたしました。 皆様のご健康を祈願して、お礼の言葉とさせていただき ます。 村松高校東京同窓会一同 宛

(平成11年12月2日)

白石 キヨ(高3)

◎いつもお便りありがとうございます。

昨年暮れ、広島から草加に転居しましてから、ようやく落ち着いたところです。都内に近いのが何よりも嬉しく年齢とともに人恋しくなり、これまで何回か同級生とも行ったり来たり、ふるさとの話に花を咲かせ、温かい友情に感謝している毎日です。

今年の東京同窓会を楽しみにしております。

亀嶋 謙(中22)

◎原稿をお送りしましたので、6月発行の会報にはぜひ載せていただきたいと存じます。元来、会報には会員の皆さんが書いたものを順次載せるべきで、私のように甘えているとは云え、連続寄稿するのは本当に良くないことと、よく分かりますので予めお詫びいたします。

私も八十才を越え本当に明日、何があってもおかしくないので、近頃、雑文でも何でも書ける時に書いておく ことを終始考えております。

五泉市 竹谷 十三五(中27)

◎クラス会のスナップ、同窓会報、素晴らしい「ふるさとカレンダー」のご恵送、感激です。感謝、感謝です。

蒲原鉄道も鉄道線を廃止、いま、バス旅行業、不動産業の会社として頑張っております。依頼の電車運賃の変遷、どうにか大正創立期からのもの調査完了いたしましたので集約のうえお送りいたしました。

お役にたてば幸です。

ちょっと嬉しかった話

「留守中に、電話があったよ。あの村松の美味しい酒を作っている所の長女だって言っていた」と、家の人が言う。「とっても美しい人なのよ。わたしお話した事はないけれど密かに憧れていた人なの」と言いながら、ちょっと嬉しい。

会報27号を読んでいて、最後の方の(ちょっといいお話)の内容が実家のお酒「にごり酒」の事に及んでいたので思わずお電話下さったとのこと。

今年の東京同窓会大会には、出席してくださると 約束していただきました。お逢いできることを楽し みにしています。また、小さな記事にまで目を通し ていただき、感謝しております。

斉藤英子さま 本当にありがとうございました。

(洋)

◎……広報委員会から……多くの方々から会報送付についてのお礼状が来ておりますが、何れも同じような内容のため、限られた紙面の関係上、割愛させて頂きました。悪しからず御了承ください。

懐旧の情 新たな新発田、五泉、村松



畠嶋 謙(旧中22回卒)

私は、間もなく八十一歳になる。年老いてくると無性 に若い頃のことが思い出され、ふるさとが恋しくなって くるものである。年寄りの懐旧談として読んでいただけ ればと思う。

昭和12年春、私は旧制村松中学を卒えると、程なく東京へと出た。五泉に在住すること凡そ16年、東京の生活が65年間に及ぶ。四十代の始めの3年程、勤めの関係で京都に居たことがあるが、単身赴任で実質は東京と大差はなかった。東京に比べると五泉の生活は実に短かく物心がついてからの記憶となると更に短く10年位のものか。30代から60代一杯までは仕事や生活に追われていたから、生れ故郷や幼時の頃を深く想い起こす機会はあまり無かった。

然し、時に強く意識させられることがあった。それは ナマリというか、アクセントというべきか、これが容易 に直らないことであった。一応は標準語らしい言葉で喋 っているつもりだが、時々何かの拍子にこのナマリや方 言が出てくる。家族や親戚の多くは東京生まれの東京育 ちであるから、その度に笑われてしまう。外部の人にも 「失礼ですが、お国は……?」と訊かれたことが幾度も ある。中でも一番記憶にあるのは60代の頃、私が早大 に勤めていた時のことで、ある事務職員から「亀嶋先生 は、新潟県の下越地方の出身ではないですか」と言われ たことである。あまりの図星に私は驚いたが「うん、そ の通り」と答えた。その職員は「実は、私も水原在の出 です。父の職の関係で新発田、新津、五泉はよく知って います。何回も行きました。だいぶ前から先生の話し声 が聞こえてくると、亡くなった田舎の父親の事を思い出 し、懐かしくて仕方なかったのですよ」と。そして私と 固い握手を交わし以来親しく付き合うようになった。

人生はマラソンレースと同じようなもので、年老いる と出発点の幼児の頃へ戻るらしい。七十歳を越える頃に なると昔のことが次々と生き返ってくるのである。 八十代に入った今は、いよいよ強烈となる。

以下は、その思い出の土地の書き綴りである。

◎新発田

私の生れたのは新発田で実家は今も残っている。生れると直ぐに五泉の亀嶋家へ養子に出たので、新発田で育ちはしなかったが小さい頃からよく往来した。兄弟も従兄弟も多く居たので思い出は多い。

新発田という地名は珍しい方だ。史書によると人命に由来するもので戦国時代、上杉家に属した豪族、新発田重家から発しているらしい。四百年前の慶長三年(1598)豊臣秀吉に覚えめでたかった溝口伯耆守秀勝が、加賀の大聖寺藩(四万五千石)から六万石に加増の上、新発田藩へ転封して以来、明治維新まで続いた。関ヶ原の合戦の折、東側についたのが良かったのであろう。江戸時代に一万石を分家させ、あとは五万石の外様大名で通した。

私の父母はもとより、先祖は新発田に長いが、特に母 方(柳川家)の初代は秀勝公に従って入封、新発田藩士 として仕えた。家系は今も続いているから、我が家には 四百年余の歴史があることになる。

新発田の見どころは城跡で、当時としては珍しい平城である。城跡に今は大手門と櫓しか残っていないが、春から初夏にかけて周囲のお掘には、菖蒲や「あやめ」が一面に咲き乱れる。それで別名「菖蒲城」「あやめ城」とかの名がある。そのほか溝口家の下屋敷庭園と足軽長屋が知られている。実家は城跡近くにあるので新発田へ行くと朝夕は必ずお掘りの周りを歩き回ったものだ。

今は自衛隊が駐屯しているが、昔は陸軍歩兵第十六聯隊があった。五泉、村松の友人達や下越の大半の人達がこの聯隊に入隊する。先の大戦時、はるか南方のガダルカナル島にまで転戦、隊員のほとんどが悲惨な死を遂げた悲運の聯隊であった。

郷社諏訪神社の秋の大祭も懐かしい。新発田は穀倉地 帯の中心だから近在の農村から人が集まって来て賑わう。 出店も多く出る。人混みに紛れまいと兄姉の手をしっか りと握って歩いた記憶がある。また私が中学四年生の春 (昭和10年) 兄と従弟と3人で、往復十里と云われてい た加治川堤の桜見物に行った時のことも印象に残る。堤 には羽越線の臨時停車場が開設されていて、近在や遠方 からの花見客で溢れていた。その当時の桜は最も盛りの 頃で幹も太く、花も見事であった。兄は旧制新潟高校生 で白線二条に雪の結晶を型取った徽章の真新しい帽子、 新発田中学三年生になる従弟も二本の白線が入った帽子 をかぶっていた。村松の帽子は白線も何も無いが、私は 村松を表徴したあの「松葉」の徽章が簡潔で分かり易く 気にいっていたので、線の無いのが少しも気にならず、 ホウの木の厚い足駄で、花の下を音を鳴らしながら歩い た。実に爽快な気分であった。

ここで新発田出身の著名人を二、三挙げてみたい。 昔は忠臣蔵の堀部安兵衛、戦前は大倉喜八郎男爵の二人 が代表であった。いまは御存じの通り。この二人に加え、 あの「金欄どんすの帯しめながら…」の花嫁人形の歌の 作詞者、蕗谷虹児。この人は大正12年に雑誌「令女界」 に詩を発表したが元来は雑誌の挿絵画家でだったという。 記念館もある。そのほかに元大関豊山、日本相撲協会の 時津風理事長がいる。

◎五泉

五泉は、そこで育つこと16年だから、今の年齢になると懐かしく思い出すことが多いが、それらを思い出して順序よく明瞭に記することは困難である。

養父母は元々土地の人ではなく五泉には親戚は一軒もない。従って町の中心部に住んでいたが、学校の友達以外、訪ねて行く家はなかった。幼い頃、家の出入りの大工の棟梁で私を特に可愛がってくれた人がいて、よく近郷の太田、善願、今泉、三本木、土深などへ手間仕事に行く時、弟子に道具を持たせ私の手をひいて連れていってくれた。疲れると肩車もしてくれた。私は大喜びだった。仕事の合間には木の切れ端で「オモチャ」を作ってくれた。それを自慢しながら近所の子供と魚を取ったり蛇を追ったりして遊びまわった。

五泉という地名は水と関係がある。町中の何処を掘っても水が湧き出てくる。水道がなかった頃で、家庭では、ナガシに大きな水がめや桶を置いて毎朝、水を汲み入れる暮らしであった。水は清浄で美味だった。また五泉は機織り業が盛んで町を支えており活気もあり職人の家が多く、小路へ入ると長屋がたくさんあった。五泉小学校は校舎が大きく、特に雨天体操場の設備は立派で、県下でも指折りとの評判であった。近くに早出川があり清流で鮎の動きなどが見え、よく泳ぎに行ったが川原近くに桑畑があり、その実を取って食べ、口のまわりを赤黒く染めたまま暗くなるまで過ごした。春先になると腰に団子をぶら下げて、広い空き地で凧を揚げた。澄んだ大空に凧が舞いあがってゆくのが無性に嬉しかった。

町には幼稚園も無く、むろん塾などなかった時代である。五泉には数年おき位に大火事があった。何時の年だったか忘れたが、火が我が家の数軒先まで寄せてきて火の粉を浴び、怖くて体がガタガタ震えたのを覚えている。もう今はたまに帰省しても、寄る家も何軒もなく知っている人も少なくなり、みんな老いてしまった。

これが生きている者の運命であろうか。

◎村松

村松には住んだことはないが、旧中の五年間お世話になった。菓子店「三村屋」の川瀬君とは特に親しく彼の家には何度か泊めてもらった。村松は私の感じでは新発田の町を、ひと廻り小さくしたような町で町並みも似ていて、同じ城下町のせいかヒッソリとした静かな町だが、

五泉と違ってどこか文化的な雰囲気があった。村松藩は村上藩の分家が独立したものだが、三万石の小大名とはいえ藩校もあって歴代の藩主が、しっかりした教育、学問を代々守り伝えて来ていたものと思う。

日本の漢和辞典編纂の大御所、諸橋轍次氏は村松に生まれ小学校まで育った人である。詩人として有名な堀口大学氏(長岡出身)の夫人は村松町の出身で、少女時代は文才に秀でた人と聞いている。

私たちの大先輩である千代国一氏(旧中18回卒)は日本短歌界の長老で、これまで八回も宮中「歌会始」の選者を勤められた。また「国民文学」の編集、発行もされ現代歌人協会の理事にも就任されており、我ら母校の誇りとする方である。

村松で一番印象に残るのは、学校を除けば、愛宕山と村松公園である。愛宕山は低いが(103m) 眺望が素晴らしい。特に松林の群れがいい。旧校歌の一節にも歌われている。中学四、五年の頃か、クラスの者3人で何度か授業をサボリ、赤山から愛宕山へ入り、山頂近くの店へ「松茸飯」を食べに行った。一度、柔道の笠原先生に見つかり大目玉を食ったことがあるが、あとは何のお咎めもなかった。笠原先生は体に似ず、気持ちの優しい先生であった。

多少老いてはいるが、3000本余の桜が一斉に花を開く公園もいい。全国的にも有名である。広々とした芝生の上に寝転んでは、お互い自由気侭に語り合い青春を十二分に楽しんだものである。

私は随分長い間、村松へ行ってなかったが、つい二、三年前、五泉で法事があり翌日タクシーで公園を訪れた。僅か20分位であったが愛宕山や公園を散策した。往時の思い出が頭の中を駆け回るのだが、そのひとつひとつに囚われていては反って大きな想い、情景を失ってしまうと思い、ただウットリした気分になっただけで満足して再び車へと戻った。

機会があれば、もう一度、いや何度でも私の生まれた 地、育った地、学んだ地を訪れてみたいと考えている。

(平成12年1月 記)

ちょっと無理な話

◎一日だけでも良いから大臣をやってみたいと思っている。記者会見をして、外交、国防、教育などについて思いのたけを喋ってみたい。そして翌日クビになってもよい。野に在っては、マスコミが相手にしてくれないからだ。如何でしょう?森さん。

(伯)

旧陸軍墓地はどうなった?

東京同窓会長 佐伯 益一(中27回卒)



中学四年か、五年の時だったか忘れたが、軍事教練の一環として、日露戦争の生き残り石黒重次郎老中尉ドノに率いられて露営の幕舎を張ったことがある。露営地は練兵場の端にある実弾射撃場近くの小高い丘にある陸軍墓地の広場であった。そばに小さな川が流れていたようである。(そうでなければ飯盒炊餐など出来る筈もないし、また この場所は最近、古い地図で知った)

食事後の大休止の時、私達はたくさん並んだお墓を、一つひとつ見て廻った。さながら会津飯盛山の白虎隊の墓が二列、三列と横隊に並んでいるようで数は覚えていない。墓石は粗末で、荻野石のようでもあった。表には陸軍歩兵二等卒、または一等卒、何の何某の墓と彫られており、裏面には驚く事にその殆どが何年何月、溺死とあった。年号は分からない。(卒)とあるから凡らくは明治末期か大正の年代か?

私はこの「溺死」の二文字に大きな疑問と関心を抱い た。あとで石黒中尉ドノに訊いてみた。

「それはナアー 村松聯隊の兵隊が大日原の演習場へ行く時に阿賀野川を渡る渡船が転覆して多くの兵隊が溺死したんだ…その墓よ」との答。それにしても将校の墓が見当たらなかったのは不思議であった。或いは私の見落しであったかも知れぬ。その日、私達が墓地に着いた時また去る時も、着剣して捧げ銃をし、弔意を表した事はいうまでもない。……はるか昔の事である……

当時の大日原演習場は、今の水原町飛地にあり、現在は 自衛隊演習地となっている。大日という地名がある。

以下は後日談である。

その後、軍事的歴史の好きな私は 再びこの墓地を訪れ てみたいと長い間思い続けてきた。村松へ行く度に多く の人に、この所在を訊いてみたが、誰も知らぬと云う。

昨年8月の本部同窓会総会に、八木、深見両役員と共 に出席した帰り、当時マドンナと騒がれた同級生の佐藤 静子さん宅へお寄りした。そこでまた訊いてみた。

「伊藤さんなら御存知かも」と早速電話して下さった。 郷土史研究家の伊藤正氏(旧中32回卒)のことである。 間もなく マドンナさんを通じて伊藤氏から地図を付 した詳しい説明が送られてきた。それによると大正3年 の陸地測量部の地図には明らかに射撃場の東に石碑、石 塔の記号がついている。此処が陸軍墓地であった。

戦後、取り払われて昭和30年代には番坂(ばんざか)からの道が残り、墓地跡は砂地の小さな広場となっていたとのことで、墓地跡は土(山砂か)取場となり少なく

とも6~7メートル位の厚さの土砂が削り取って搬出され、

いま 番坂へかゝる道も2~3メートル位低くなっているのでないかと思う。昭和56年の地図では建物の記号に変わっている。ちょうど墓地の在った辺りの現地表面に今の「愛松園」が建っていることになると記してあった。

墓石の行方は不明、町の郷友会(元軍人の会)の人、 或いは新潟の護国神社へ問い合わせたら分かるかも知れ ぬと付記してあった。私は番坂を知らない。

なにか記念碑か慰霊碑でもあるのかなとも思ったが、 それも不明。恐らくは無いであろう。墓地には戦で亡く なった将兵の墓も多くあった筈。全国各地には忠魂碑や 各種の記念碑がたくさん建っていたが戦後、みな取り払 われた。戦勝国への遠慮か、命令か、時代の趨勢か、今 となっては昔の歴史を知るすべもない。残念に思う。 逆説だが、中国や韓国にある反日的記念碑や記念館等を 想起してみるがいい。

鹿瀬町には神社の境内に、県出身の鈴木荘六元陸軍大将の揮毫した忠魂碑が現存している。私は帰省する度に、名も顔も知らぬ英霊の、その碑に向かって軽く頭を下げて通り過ぎる。

余談になるが、真偽の程は知らぬ。

かつて 村松町で自衛隊誘致の話が出たが、大方の反対 で実現しなかったという。もし誘致に成功していたら、 現在の村松町は随分と変わっていると思う。

とにかく これで積年の謎が一つ解けた。墓地が無くなって、ガッカリしたのも事実。調べて下さった伊藤氏とマドンナさんに厚く御礼申し上げたい。

今度は「愛松園」とは何だと、また考え込んでしまった。

最後に 「私が何故この小稿を書いたかということを 皆さんに考えて頂きたい」と思っていることを付け加え させていただく。

ちょっと・どうでもいい話

◎家にいると、毎日のようにマンション、お墓、投資など勧誘の電話がかかってくる。多いときには日に五回もある。一体、何処で調べるのか不思議だ。つい二、三日前に墓の勧誘の電話があった。田舎に先祖代々の墓があるからいい、と言ったら田舎はどちらですかときた。新潟だと答えたら「私も新潟です。して、どの辺?」とまた訊く。うるさくなって、東魚沼郡だ!と言ったら「あゝ、いい所ですねお米も旨いし」だって。バカモン!新潟県にひがし お米も旨いし」だって。バカモン!新潟県にひがし 魚沼郡なんてあるもんか! ガチャン… (伯)

仲間意識と身内意識

伊藤 勇五 (旧中33)

◎仲間意識、身内意識と云う言葉を時々聞くことがある。一般に同じ様な意味として使われているが、私は本当のは全く違うと思っている。

先頃、警察の不祥事が続いて問題となったが、その中で、おらが生国さの新潟県警が何とも情けない失態を演 じたのはご存じのとおりです。

かなり以前、三条市で少女が誘拐された事件があった。 長い間未解決のままで人々の記憶からも遠くなっていたが、両親や身内の祈りが通じて、実に9年ぶりに発見された。犯人は柏崎の男で何と其奴が自分の家の二階に少女を監禁し、部屋から一歩も外へ出さず閉じ込めていたというのには驚きと同時に怒りが納まらなかった。

新潟県警の不祥事はこれに関わる失態だけに、県民は 疎か全国の人々に大きな衝撃を与え、厳しい批判を浴び たのであった。これに就いて県警トップの本部長が釈明 の会見を行ったが、その席で臆面もなく嘘を重ねて云い 訳をするいい加減さに腹が立ってならなかった。特に誘 拐された少女は柏崎の保健所の職員によって発見された のに、県警はこの事件に対する捜査ミスを補うためか、 少女は警察が発見したと発表し、それが嘘だと指摘され るや、今度は「第一発見者に迷惑が及ぶのを考慮してあ の様に発表した」と弁解する図々しさと、少女が発見さ れた時、県警のトップは偶たま特別監査の名目で中央か ら来潟していた関東管区警察局長を、県内の温泉に招待 し部下の幹部を連れて一緒に接待マージャンにうつつを ぬかして居たのであった。この時局長が「県警に戻らな くて大丈夫か?」と一応は質したにも拘らず「構いませ ん」とそのまま朝まで居続けて戻ろうとしなかった。認 識の甘さと、立場を忘れた姿勢に怒りを通り越して呆れ てしまった。警察組織の中で、キャリアと云われる人達 の余りにも一般の人とかけ離れた物の考え方と、そのキ ヤリア達がリードする警察の組織に、国民の信頼が揺い だのも当然であろう。

この度の不祥事に対してマスコミや学識経験者の中から『この組織は仲間意識、身内意識が非常に強い。だから内部で起きた不祥事をお互い隠し、庇い合う体質があり、そのためには嘘も平気でつく』と云う声が聞かれた。

私は冒頭に、仲間意識と身内意識は全く違うと書いたが、これには持論があって、私に云わせれば警察組織の中には仲間意識があるだけで、身内意識などある訳がないのである。…以下、持論を述べさせていただくと…。

仲間とは判りやすく云えば、一緒に物事をする人達の ことであり、仲間意識とはその人達の持つ連帯感だと云 える。同じ目的で集団を構成する人達は、利害を共有し ているためその組織を守ろうとする意識は異常に強い。 本来、他人の集まりながら仲間に何か不都合が起きた時、たとえ多少筋が通らなくとも最後まで庇おうとするのは、集団、組織を守るために他ならない。結果としてそれが自分を守ることになるからである。一連の警察の失態隠しがそれを示している。仲間意識の根底には自分を守る欲と計算があると思っている。

身内とは、判り易く云えば家族や親しい関係にある親籍の人達(一族)のことであり、身内意識とはその人達の持つ『一体感』だと云える。同じ血縁で一族を構成する人達は、血脈を共にしているため、その一族を守ろうとする意識は純粋に強い。しかし、この人達の意識の中には一族としての誇りがある。誇りがあるから恥を知り、恥を知るから自制が出来るのである。この自制をする意識が筋の通らない言動を慎しませるのである。身内の不始末を庇い、欲の手助けもするが、飽くまでもそれは、一族の名誉を汚さない範囲内においてのことである。

身内意識の根底には一族を守る誇りと自制があると思っている。警察組織の中に本当の身内意識があれば、あの様な体質には絶対にならない筈である。しかし、あの体質はなかなか変わらないだろう。身内はそのままでも仲間になれるが、仲間はそのままでは身内になれないからである。

旧中34回・高2回卒 同期会(平成11年)報告

◎旧制中学第34回、高校第2回卒業生の同期会が平成 11年7月4日~5日の両日、神奈川県厚木市の飯山温 泉元湯旅館において開催された。

初参加の2名を加えた23名の有志が料理に舌鼓を打ち美酒に酔い、若き日の想い出を夜更けまで語り合った。 {松龍会誌、第6号(12.3.1)より}



飯山温泉・元湯旅館にて(神奈川県厚木市)

計 報

内田 力氏 (母校々長)

村松高校々長・内田 力先生が病気療養中のところ 入院先の済生会新潟第二病院で、3月26日午後2時15 分、直腸ガンのため亡くなられました。

告別式は同29日午前10時より、新潟市の青山会堂で執り行なわれ、学校関係、教え子等、大勢の方が参列、また 本部同窓会より伊藤会長始め二・三の役員の方が参列されました。ここに謹んで哀悼の意を表し ご冥福をお祈りいたします。(享年60)

なお 東京同窓会からは御香典を送り弔意を表しております。 合 掌





先生は平成10年4月に着任以来、僅か2年間の在職でしたが温厚で真面目、活発なスポーツマンでした。来年3月に定年とのことでしたが、誠に残念に思います。 後任には県立松代高校の杉原校長が着任されています。

蒲鉄の思い出・俳句と短歌

◎俳句

・赤トンボ さよなら電車 吊り輪ゆれ 安田町 山口 精一(中26)

・蒲鉄の 消えし村松 ひた走る 練馬区 福原平八郎(中26) ◎短歌

・丘を越え 山かげ抜けて ひた走る 四季の回想 蒲原鉄道 練区 福原平八郎(中26)

◎とにかく蒲原鉄道にはお世話になりました。家が出雲崎でしたので、越後線・弥彦線に乗り、東三条で乗換え、加茂からの大切な足でした。

松五会、老いてますます盛んなり

◎松五会とは、村松高校第5回卒業生の集まりである。 卒業年度でいえば、昭和28年に学び舎を巣立った仲間た ち。現在、210名の名前と住所が確認されている。

ほぼ10年前の事だ。金子鶴男氏(五泉出身)が「みんなで楽しく語り合おう」と知っている人たちに呼びかけた。賛同者は喜んで幹事役を買ってでた。

以来、毎年、東京と新潟で交互に会場を選び、楽しい 集いを続けている。ことに、昨年の第10回・越後湯沢で の会は北海道や愛知県からも懐かしい人たちが駆けつけ、 会場は熱く盛り上がった。

一度、出席した人は必ずやってくる温かい会である。 すでに次の第11回を待ちわびる声が高い。そのため4月 9日(日)、櫻満開の上野・北京飯店で幹事会を開催した。すると、この席に東京同窓会の佐伯益一会長から、 津川の銘酒・麒麟山の一升瓶が二本もドーンと差し入れ されたのである。まさに大感激!「おい、今年から東京 大会にも出てみようか」といった意見も飛び交った。

松五会が東京同窓会のニューパワーのひとつとして、 その発展に協力できる日は、そう遠くないように思えて ならない。 (文責=松五会・雲村 俊慥)



蒲鉄の思い出(2)

会報第28号に蒲原鉄道に纏わる思い出を書いたが、 記事中、僅かだが通学定期運賃のことに触れている。 そこで五泉、村松間の電車賃の移り変わりに関心を抱い た。幸いに元蒲鉄の取締役であった同級生の竹谷十三五 君が五泉に居られるので訊ねてみた。暫くしてこの件に ついて丁重な手紙と詳細な資料が送られて来た。 感謝しながら、ご紹介したい。 (佐伯)

『電車運賃の変遷』に対する思考

竹谷 十三五 (中27)

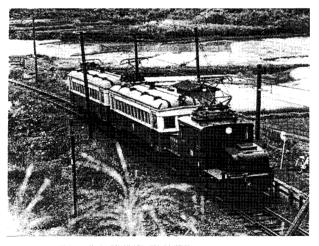
- 五泉、村松間の運賃の変遷から次のことが考えられます。開業時の運賃15銭に対して電車線廃止時の運賃が280円で正に 1866.7倍で一般物価が大正末期に対して2000倍を超えている現在、公共交通機関が国の方針で低額に抑制されて来た現状を見ることが出来ると共に、昭和40年代頃からのモータリゼーションの進展に伴う物流の変化、競争の激化等による運賃の適正化が出来得なかった事など……時代の流れが読み取れると思います。
 - 1、 大正12年当時、五泉、村松間15銭の運賃が昭和5年、加茂まで路線延長した時に12銭と値下げとなったのは、第一次世界大戦後の、昭和初期の不況に対する対応と考えられる。
 - 2、第二次世界大戦の敗戦によるインフレの進展によって運賃値上げ対応も意のまゝにならず、昭和23年始めに公務員の初任給が39.9倍に伸びたのに対し五泉、村松間の運賃は23.3倍であり、運賃が抑制されている状況を見ることが出来る。
 - 3、 戦後、昭和30年代後半から物価の上昇に伴う対応 が運賃改定で2~3年ローテーションで実施された。
 - 4、昭和60年代からはモータリゼーションの進展により、人の移動方法に大きな変化が現れ、ローカル交通の輸送人員が減少傾向となり運賃の改訂が困難となって来た。

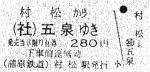
※ 我々が中学校に通学当時は12銭、開業時の運賃が 15銭、我々の常識からすると、物価とは値上がりする のみと思っていましたが、運賃が値下げの時もあったの かと…… 昭和初期の不況が相当な影響を経済界に及ぼ していたのですね。 …… 以上。

(私達の在学時、支那そば一杯が9銭から10銭、 ライスカレーが15銭、 — 当時は か-ライス とは呼ばな かった — 概ね五泉、村松間の運賃に匹敵し、まんじゅ うが、一ケ2銭であった。軍事教練は厳しかったが、 思い出の多い楽しい時代でもあった。 倒さき)

五泉、村松間の運賃の変遷 4,2キロ

実施年月日	運賃	倍率	備考
大正12年 9月	15銭	0.0	開業時
昭和 5・7月	12銭	0.8	値下げ
17・4月	15銭	1.0	値上げ
20・4月	20銭	1.3	1
21・3月	50銭	3.3	
22 - 3月	60銭	4.0	
22 • 7月	2円	13.3	
23 • 5月	3円50銭	23.3	
23 • 7月	8円	53.3	
25 • 5月	10円	66.7	
26 7.20	15円	<u>100.0</u>	
28 • 2 • 1	17円	113.3	
32 • 6 • 1	20円	133.3	
37 • 2 • 8	25円	166.7	
40 • 4 • 1	30円	200.0	
43 • 1 • 16	40円	266.7	
45 • 6 • 12	50円	333.3	
47 • 7 • 1	60円	400.0	
49 • 8 • 11	90円	<u>600.0</u>	
51 • 3 • 17	110円	733.3	
53 • 4 • 14	140円	933.3	
55 • 4 • 20	170円	1133.3	
57 • 4 • 20	190円	1266.7	
59 • 4 • 20	220円	1466.7	
61 • 10 • 1	230円	1533.3	
平成元年 4·1	240円	1600.0	消費税導入
9 • 4 • 1	280円	1866.7	廃線まで
11 • 10 • 3	泉となる		





ちょっといい話

四月に、亡父の法事で田舎へ行ってきた。 新幹線で新潟駅に着くと至る所に今春再開したSL С57180「ばんえつ物語号」の大きなポスター が貼ってある。一枚欲しくなって名刺を出しながら 案内所に飛び込んだ。事情を説明すると「今日は担 当が休みだから明日にでも」と、云う事で帰りに又 寄ってみたら既に用意してあった。然も2枚。応対 してくれた人は三人、驚く事に、そのうちの二人は 五泉出身で、わが母校の同窓後輩。やはり世の中に は「こういう事もあるのかなぁ」と思った。

嬉しくなって、持っていたSLのネクタイピンと 五泉を特集した「新潟県人会報」を各々お渡しして きた。頂いた名刺には、新潟駅営業総括助役・斉藤 一良、とあった。昭和40年・高校17回卒。

一枚は県人会館会議室に貼らせてもらうつもりでいる。強心臓もたまには役に立つなと思った(伯)

本会報に「千代國一氏の歌集を読む」の、岡村三夫氏 の寄稿文が掲載されておりますが、その後、次の事がら が分かりましたのでお知らせします。(広報委員会)

◎短歌新聞社設定の第七回短歌新聞社賞が、歌誌「国民文学」編集発行人の千代國一に贈られる事になった。と、3月10日発行の短歌新聞一面トップに掲載されていました。対象歌集は、第十一歌集の『水草の川』で、歌歴六十年におよぶ歌壇の長老のひとり、千代氏の喜びの声を聞いた。と書いてありました。

ご受賞おめでとうございます。(千代氏…旧中18回卒)

ちょっとおもしろい話

◎東京同窓会広報委員長の沢出さんから編集会議の 案内状が届いた。何気なく読み机の上に置いた。と 同時に「えっ?」再び手にとる。漢文?中国語?… 違うと思うんだけど?…それは送り仮名抜きの漢字 だけで構成された文章だった。まじめな顔で時どき シャレを飛ばす沢出さん独特の遊び心かな?

それともワープロ作業の省エネか? などと思いついも、少しは中国語を解するが自信があるわけでもない私にとって、このような表現も可能なのか? と、俄かに不安と探求心が頭をもたげ、遂に辞書を取り出し私なりに中国語での案内状を作成してみたそして、改めて日本語の優雅さ、きめの細やかさを思うとともに丁寧さの過剰を実感した。また私達が多用する「御」の字は、中国語では「御者ぎょしき」つまり「馬車を御する」以外は、封建社会に於ては

- ① 上が下を支配する (統治する)
- ② 皇帝に関する語の接尾語

(例えば…天子が御覧になる)

とあり、「御」の字は本来軽々しく使ってはいけな い文字なのかと考えさせられた。

それにしても沢出さん、面白い事考え出されますね お陰さまで私も一晩、言葉遊びを楽しみました。

我了解御字的意志·道是対今日最大的成果了。謝謝 (深見)

口に事件や事故が多いそうです。 小明で五日には森内閣発足。 一一歳前後の人の携帯電話通話料は | 月末の失業者、三百五十万人。 月三十一日に有珠山が噴火し洞爺 満開のチューリップの写真。 |汚職事件でキャリア逮捕。 | 三月の 培され観光客にも人気との事 四月二十七日、朝日新聞朝刊 温泉や周辺観光地は長期休業。 埼玉県本庄市の偽装結婚と保険金 が発覚、三名が懲戒免職 そごうデパート、六千四百億 五泉市巣本地区で百五十万本 カー被害届けを門前払いした 四 小渕首相緊急入院し意識 一〇四パ

平成12年6月 第29号

発行人 新潟県立村松高等学校東京同窓会 広報委員会

事務局 〒 157-0061 東京世田谷区北烏山 3-13-15-104(八木又一郎 方) 電話・FAX 番号 03-3307-1048 編集復記